

①-235 12世紀末 180~1192の内に 137 5.892-1/3 1688 日本史 高松(緑) 121 1242 外戚 355 藤原一族

第九十七章 南北朝時代(二朝時代)

藤原一族が天皇の外戚として政権を掌握し

栄華のかぎりをつくした摂関政治の時代は長

かつた。だが、ほとんど政治らしい政治のな

り、ただ華麗な儀式ばかりに頭をめぐらめせ

ていた貴族達の世界は、やがて武士たちによ

り、突き崩されてゆく

保元・平治の乱によって、政権を握るよう

になったのは平氏であつた。つまり、平氏に

よる六波羅政権といわれるものが誕生した。

(第567回へ平清盛参照)

平氏も新しい武家勢力をえ

分に糾合することから出来が、貴族化してしま

い、まもなく権勢の座を源氏に譲る(第568回)

また、源頼朝が十二世紀末に幕府を鎌倉に

開いてから始まつた鎌倉封建制社会は、十四

世紀初期の元弘三年(一三三三)五月に北条

源頼朝像参照

カラー
右頁の上半分に
掲載下さい。

548^r

▲

カマノ

5,892^p - 2/3

1109 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵



548

右ツマ

1404 567

第567 図

平清盛 (1118~1181)

1304

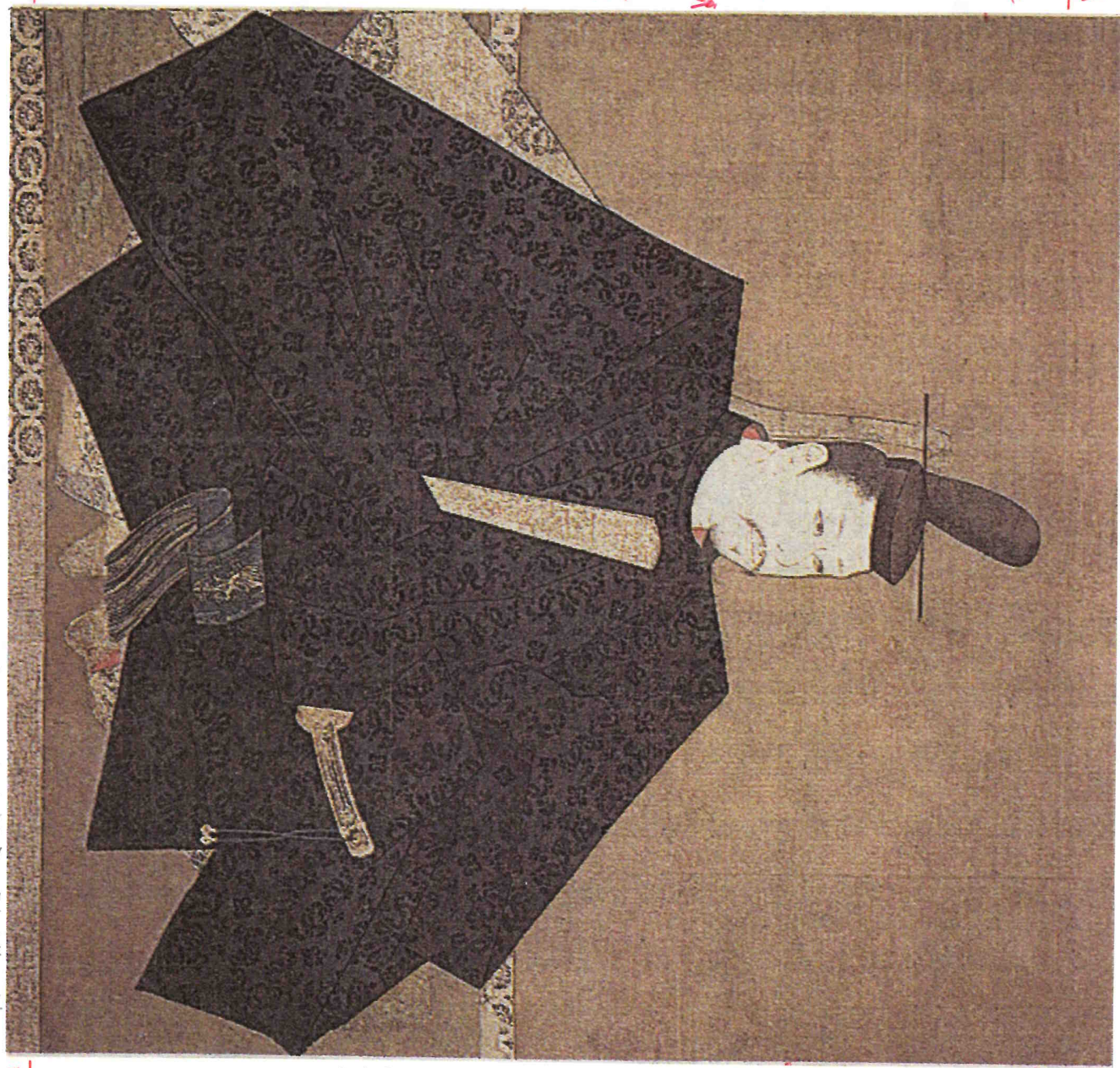
『日本の名戦』加藤亜紀 (せいとう) 西東社 2014年1月10日発行 23頁参照

・カラー
左頁の上半分
掲載下さい

・図3<17
おいて下さい

・服のモヨウが
見えますように
お願ひします

5,892 P-3/3



1409 『源朝の中心人物』 源頼朝 1109 国史 京都市右京区神護寺蔵
第568 図 (伝) 源頼朝像 (1147~1199)

1309 『朝日新聞』 平成26年9月6日付、「京人のいさかい」参照

この図の裏に貼布して

氏が滅亡して終りをつづる。とになる。(「日
本史」大阪教育図書刊、一三七―一六五頁参
照)

米

皇統譜を掲げておこう。(第59表参照)
● 後嵯峨天皇(一二二〇―一二七二)
仁治三年(一二四二)即位。在位四年に

て後深草天皇に譲位。文永五年(一二六八)
落飾された。譲位後、長期にわたって院政を

● 後深草天皇(一二四三―一三〇四)
● 後嵯峨天皇の第三皇子。寛元四年(一二四

六)父天皇の譲位を受け、御年四歳の時に即
位。正元元年(一二五九)、御在位十四年に

して後嵯峨上皇の御薨により、弟(第七皇
子)の龜山天皇に譲位された。

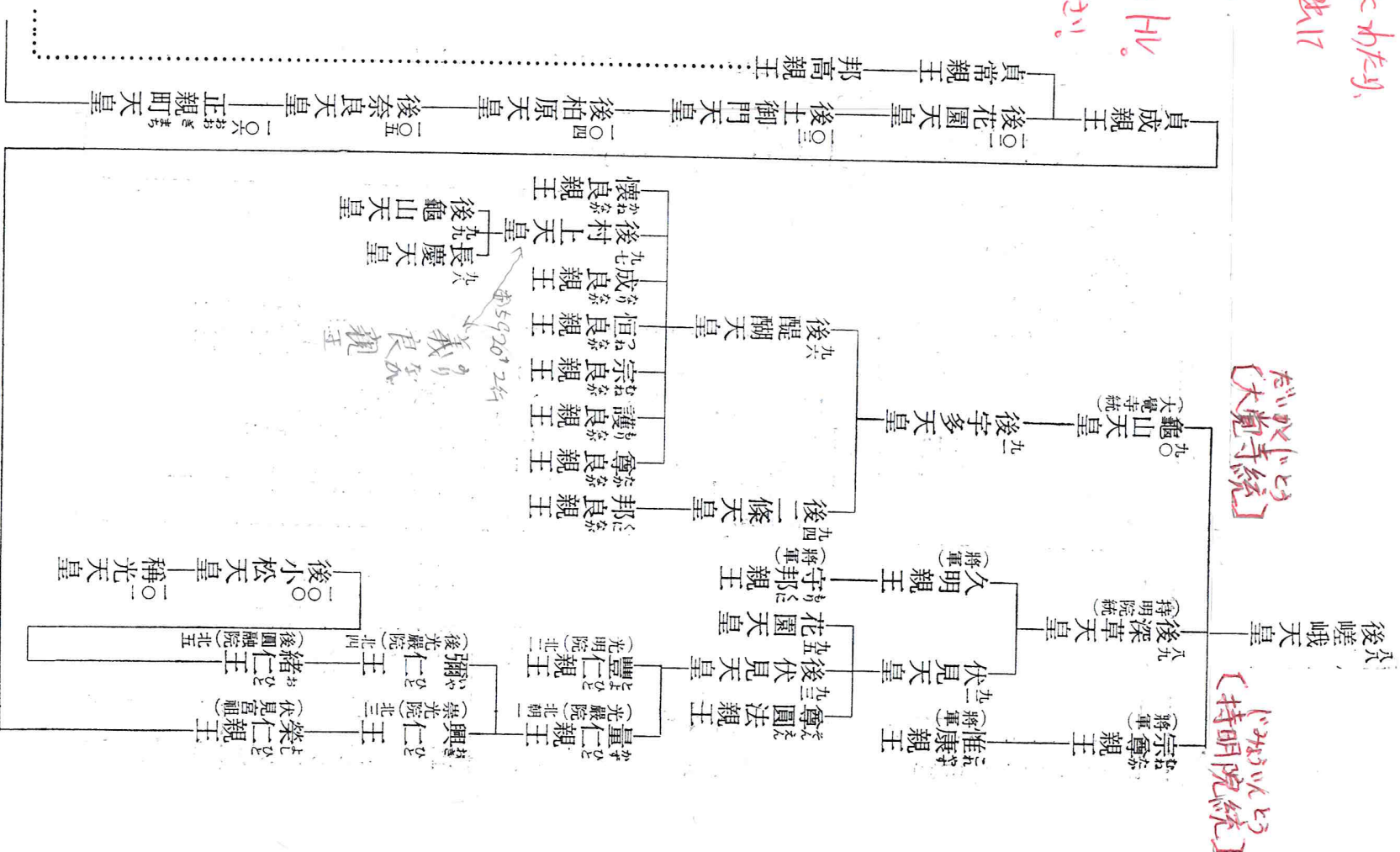
● 龜山天皇の文永九年(一二七二)、
後嵯峨上皇は、崩すに臨み、

1504

第59表 歴代皇統譜

右頁の右端、
上段・下段にわたり、
限及一杯はみ出し
掲載下さい。

全面ヨゴレをHv。
全てゴチに17下さい。



5,894 P

551

1304

皇室大百科 朝日通信社 昭和50年3月10日発行 396~7頁参照。

遺勅 元129^p 日本史 高橋 149^p
後世に読む勅命
天つぎ 改行 皇室大百科 246^p 1/4

たてない
天皇の系統

なせなせ 126[?]
皇室大百科 252[?]

日本史高校 165[?]
元弘の乱 706[?]

5,896^{P-1/2}

広辞 1101[?] 日本史高校 165[?]

はてし 1801[?]
披露

日本史高校 164[?]

鎌倉幕府を倒すことか必要だった(第589回)後醍醐天皇(参照)

●文保の和談以後幕府討伐の重要性を痛感した

後醍醐天皇を中心とする朝廷側は、延喜・天

曆(醍醐・村上)天皇一の治世を理想として掲げ、側

近に北島親房を抜擢し、諸国の反北条武士や

非御家人を糾合した。

●朝廷を中心とした討幕の計は着々と進められた

が、正中元年(一三二四)挙兵の計画が漏れた

●後醍醐天皇は、その意が無いとを秋明

し、ようやく事なきを得た。こゝを、正中

の変という。

●そのものの、其の後も後醍醐天皇の志はかめ

らず、討幕の密議がかわされた。一か一意外

にも吉田定房の密告により、元弘元年(一

三三一)とは再び露見した。こゝを、元弘

の変という。

●元弘元年八月二十四日夜、計画が漏れて元

波羅軍が出勤する。と知った後醍醐天皇は

密かに宮中を脱出し、比叡山・奈良東大寺を

経て、笠置山へお入りになった。

・カラー
・右頁上半分にはみ出いて
大きく掲載下さい。



中央の十字状の黒い線は
できただけで、国はたまたまに
(ただけで)

5,896 2/2

1404

後醍醐天皇 (1288~1339)

第569回

1304 日本
の
合戦
加
唐
垂
紀
西
東
社
2014年1月10日発行 47頁
参
照
可
。

大平記2-31P
備後という

地名辞198P
百科⑪-200P
増鏡462P

太平記(2)-39P
皇室大百科252P
5,898P-1/2

日本史辞372P「なせなせ」126P
院の庄 更いとの受賜後174P

544P-2/4

HL

天皇✓。「歴史読本」第二十九卷第十八号、
新人物往来社、一二六頁、光厳天皇が神器も
ないのに踐祚できたのはなぜ✓。「広辞苑」
ハ即値参照

米

ときには入れいなキトもあうす
時非無范象

笠置山付近で捕えられた後醍醐天皇は、翌
元弘二年(一三三二)三月に隠岐へ配流とな
った。

後醍醐天皇を乗せた輦輿の護送の列は、播
川の三日月を通り、美作国の院の庄(津山町
の西六丁)の行在所に着いた。

その折のことであつたという。
行宮の庭前の桜樹の肌を削り、

天莫空勾踐
ときには入れいなキトもあうす
時非無范象

と書いて、天皇への忠誠を誓った者がいた。

それは、疑問視されてゐる。とではあるが
通常、備前国(岡山県)の人、児島高德であつ

あさとでえ36
朝戸出 朝、戸もあけて外へ出る

か
畏二1 } 2404
賢21

5,898^P-3/2

い、ま 137^P 思ひ出の愛唱歌集
出て座 174^P 5^P

地名 5901-1/2
地名 1387

たろうと言われ、明治以来小学唱歌に
次のように歌われ、有名である。

見島高德

船坂山や杉坂と 御あと慕いて院の庄、
微束をいかで唄えんと、桜の幹に十字の詩。

天勾踐を空しゅうする莫れ。
時范蠡無主にも非ず

御心ならぬいでましの 御袖露けき朝戸出に
天勾踐を空しゅうする莫れ。
時范蠡無主にも非ず

*

太平記(2)-52^p 541^p-3/4 OK
532^p 541^p-3/4 OK
5899^p

私本太平記
(2)-52^p
夫差 1934^p
勾踐 746^p

思い出の愛唱歌集
174^p~5^p

原文「は」とある

院の庄の行在所 庭前の桜樹の幹に記さ
た詩句のいわれと、その解釈をすれば、こ
うである。一私本太平記(二)吉川英
治全集、講談社入院ノ庄参照
支那の遠いむかし。周と呼んだ時代
の末頃。
吳と越という二つの雄藩が、覇を争って併
各をうかがい合っていた。が、越王勾踐は、
会稽の一戦にやぶれ、吳王夫差の虜となり
吳城の土牢に入れられて、幾年かすぎていっ
た。
ここに范蠡という越の忠臣がいた。身を
塩魚売りにやつて、吳城の禁獄へ忍び
こみ、魚の腹に一片の密書をかくし、獄へ投
げて逃げた。勾踐が魚を割いてみると
主君よ。范蠡がおります。どんな辱に耐
えても、死に給うな
とあった。第六章 吳国の台頭 項において既述
やかて時節が来た。勾踐はもう叛く力など無

「天皇の御心のかた
を村度して」
の降ろ。

太平記(2)-52

た起つ 小村 935P
同文 366-3/4 5,900P-1/2

かんげん
言 488

い者とみられ、ゆるされて越の国へ還され
た。
もつともそのためには、最愛の美女西施を
呉王へ献しなればならなかった。范蠡が、
主君をいさめ、あえてその愛人西施をす
敵の呉宮へささげさせたのだった。
呉王夫差は、この天下第一の美人をえて、
大いに驕った。呉の良臣、伍子胥の諫言も耳
に入れず、荒淫と、連日の宴舞に、国政もみ
だれ果てた。
ついに、待つ日は来た。
越軍二十万が、呉へ襲いかかった。四隣の
晋も楚も斉もいちどに起って、呉の領土を分
け奪りにし、呉はついに亡んだ。
かくて、越が積年の讐会稽の辱をすすぎ
えたのは、ひとえに勾践の下に、ただひとり
の范蠡があったに依る。と、漢土の史書
は彼の名と忠節とをたたえている。
その故事になぞらえ、何者かか、後醍醐
天皇を勾践に、自分を范蠡に擬して、この桜

ひょうごう 1897
評定 1898
仁人 1153

皇室大百科 463

5,900-2/2

Lは、次頁 999

おっしや 308
仰る 308 太平記(2)-52

小林 528

樹の幹へ、心を託した。たちがいな。眼を侍者の一条行房と千種忠顕の二人は、眼を見あわせたか、口には出さな。ひとく、後醍醐天皇も奥を出て、御覽になつたか、凝視、そのままで何も仰つやるところはなかつた。という。また、こうもいう。見島高德は、備前の人で本姓は三宅氏、備後三郎と称した。天皇が隠岐の国へ御幸さる。タとになつた。と聞いた見島高德は、二心なき一族の者を集めて評定し、志士仁人は生を求めて仁を害すなし、身を殺して仁を為すことあり、という言葉がある。義を見ていないのは勇気がないのだ。さあ、臨幸の途次に参り、君を奪い奉って忠義を尽そうではないか。と言え、皆同意した。

天日槍の子孫か

天日槍の子孫

ちんせいの せんぱうせん
行在所 船上山 1267P
5907P

思ひ出の愛唱歌集
175P 十字の詩 5,901P - 1/2
なぞさえて 5907P

はとせいの 小林 414P (ゆき)
所在 船上山 1120P
上開 元 1108P

船坂山
杉坂

思ひ出の愛唱歌集 175P
地名 1387P フナカサ

さらば路次の難所にお待ち申そうと、備前
と播磨との境にある船坂山のいただきにかく
れ、今か今かと待った。
しかし、天皇は、播磨の今宿から山陰道
の方へ行幸し奉った。
それではと美作の杉坂へ着いたが、天皇は
はや院座へ入られた後、あつたので、みな力
なく、散り散りになつてしまつた。
見島高徳は、せめてこの所在を上聞に達し
たいと思つて行宮へ行き、天皇の御座のある
御宿の庭の大きな桜の木の前を削ると、
大文字に一句の詩を書きつけた。
それか「前掲」の十字の詩である。
口歌薪嘗胆の故事と重ね合わせて、見島
高徳は、心の内の思いを申しあげたのだつた。
翌朝、こ水を見つけた警固の武士どもは、
何事が書かれていますのか読みかねて、上聞に
およんだ。
尚、予め述べると、翌年（一三三三）後醍
醐天皇が院政を出て船上山（鳥取県の西域に
位置する六八〇坪の山）山上の智積寺を行在所

六一六という白い高竿地帯は、
日本列島に

5901-P-2/2

こうとくい
た
こうすけ
上野口 2745
カウツヤ

所とされるや、見島高德は千種忠頭ちぐさただあきに属し、
六波羅ろくはらを攻めた。

また、見島高德は、足利尊氏あしかがが謀反した時
新田義貞、弟脇屋義助に従って戦った。義助
が病没後はその子義治を助けて王事につとめ
た。

そして見島高德は、晩年剃髪して義晴房ぎはるふさと
純と称し、上野国こうすけのくに（群馬県）邑楽郡大川村に
高德寺を建てて住んだと伝えられている。
（「皇室大百科」朝日通信社、四六三頁へ見

島高德）。「云辞苑」へ船上山せんじょうさん参照

*

前千種忠頭ちぐさただあきか、六条忠頭ろくじょうただあきは魚川

ニ(子たかの) 乙
796P
① 5898⁰-K18H
② 5900⁰-1218ST

とは、何ともちぐはぐなものである。

桜樹の幹を削って、そこに詩句を書いた本
 人は、まじうかたなき真実の志を述べ、天皇
 への忠節を誓ったのであろう。その忠誠心は
 後代の人々の心を感動させずにはあかな
 いものであつた。
 だが、それはそれとして、あえて記せば、
 太伯の後である。すなわち、吳王の後である。
 と自負してゐた倭人の末孫である後醍醐天皇
 を、よりによつて吳國を滅亡におとし入れた
 敵方の越王勾踐に擬したのでは、―――忠
 誠心の心も、肝要な点での外的であつたよう
 に思われる。
 恐らく、これを書いた当人は我が國の往古
 の経緯について全く知らなかつたのであろう
 が、―――それにしても、あううことか
 (1) 後醍醐天皇を、祖先(吳王)の仇敵である
 憎むべき越王勾踐になぞらえ、
 (2) して、自分自身を越王勾踐の忠臣、
 (3) に見立てた、

H1.11.18(2) 5,903P

「おと」⑤5905P

お痛のにおい 10.19

大伯の末裔である後醍醐天皇は、その墨書を
見て、―――あるいは、遠い祖先吳王の無念を
思い、嘆息痛めされたのではなからうか。
■とはいえ、墨書の主の熱い忠誠心も、悲し
いはかりによく分かる。
■そこで、後醍醐天皇は、その心を傷つけま
いとして、何も仰つーやらなかったのかも知
れない。
■ところが、そのようなことなど知るよしもな
い後世の人々は、後醍醐天皇の胸の内の思い
を推し測り―――当然、いたくお喜びになっ
たと考え、口うるわしい美談と解した、よ
うに想像さへる。

*

5,904 P ぼん 元 1958
反 我 が ぼん 元 1958
ぼん 元 1958

皇室大百科 418 ↑ 地名辞
増鏡 463 ↑ 解説あり 「とろて」 5870-3/2
5921 P

と、こので、後醍醐天皇か、
あはれとはな小も見らん
我民と思ふ心は今もかはらず
と御詠みになつたのも亦、この院／＼庄（院莊）
でのことであつたという。（「帝国地名辞典」
太田爲三郎、名著出版へ院の莊。増鏡
へス米のさら山（参照）
後醍醐天皇は、桜樹にたためた墨書の主
のことが不慣で、深く胸をお痛めになり、
私（の）ことを、お前もまた気の毒に思つ
てくれているのであろう。（桜樹の詩句は敵
をたたえものであるが、しかし）お前を
我が民と思ふ心は、昔と同じく今も全く変
わりない
と、その時の複雑な心境を歌にされ、桜樹の
歌の主が非難さ小ないうよう
なつたのかも知れない。
■そして、この歌に「今もかはらず」とある
ところから推察すると、
へ誰か、桜の樹に書いたのか

H 9.8.30(土) H29(2017)12.3(日)~
 H 6.7.10(日) H30(2018)12.2(月) 21
 R1(2019)5.2(木)~5.2(3回)
 R2(2020)7.26(月)~7.22(4回)

5.905P

1/2 F 1/2
 7/21

昭和四十二年七月(第三刷)発行

米

九参照)

本古典文学大系、岩波書店、四六三頁、注十

というのである。(「神皇正統記・増鏡」日

と歌ゆ水た

だ
 七

かわいく思う心は、今でも昔と変わりないの
 ろうが、私がお前たちのことをわが民として
 口私のお前たちも気の毒に思うであ
 者達をあはれにお思いになり、

13.5 AM 後醍醐天皇は、近くに仕えてくれている

るのかを明らかにして去ったのであろう。
 つまり、范蠢を名のる男は、自分が誰であ
 るのかを明らかにして去ったのであろう。

ように思われる。
 後醍醐天皇および側近らは、御存知であつた

5898' 5行 銀行
1331年9月20日

またもや二朝の世出現

天波羅 新田義貞 1698 相元 1683 5,907
 名 2360 鴨川の東 57条 皇室大 白 253 5901 1/2 1030 P

千早城 1431 5927 船上山 5901 1/2 1030 P

1392 1332 60 太平記 258

後六十年も見る端緒と^なったのだ。た。参照
 (「私本太平記」吉川英治「夏隣り」)

米

後醍醐天皇の皇子護良親王が吉野に^たち

楠正成が千早赤坂(大阪府南河内郡)に^たち

近畿の義兵が一時に蜂起した。

元弘三年(一三三三)閏二月、後醍

醐天皇は、六条忠顕を^たか

名和長年に迎えられ、伯耆(鳥取県)の船上

山の山を行在所とされた。第570回(名和長年)参照

一方、鎮西においても、菊池武時等が義兵

を挙げ、結城宗広(陸奥白河の人)等もまた

白河より起ち、東西相元して北条氏に^たち

たため京都の六波羅は^たち

次いで新田義貞が鎌倉へ入り、北条氏

(鎌倉幕府)は滅亡するに至った。時に、元

弘三年(一三三三)のことであつた。(「皇

5,907P- 3/2

- ・カラー
- ・頁の上半分は、大きくはみ出し掲載下か。



均等
ほうき

1424 570

第570回

伯耆(鳥取県西部)で後醍醐天皇をお出迎える名和長年

1104 伊藤紅雲筆

1324

『名画にみる国史の歩み』編者 所功 近代出版社 平成12年4月19日発行 41頁参照

569P

京都で戦死

名和長年は、船上山に行在所(後御所)を設け、来襲した幕府軍を撃ち破った。その後も南朝への忠誠心が厚く、延元元年(1336)6月30日、

H9.8.30(土)
H6.7.11 男

5,908^P

1人せい 云 1154^T
かいかい 親政
云 370^P 百科④-568⁺

百科④-568⁺
改訂

おくりの 云 2274^P
⑤ 5897^T
⑤ 5950^P

室大百科し朝日通信社、二五三頁参照)
④後醍醐天皇は、鎌倉幕府の滅亡直後、幕府
を擁立した天皇光厳院と、正慶の年号の廃止
を宣言された。そして、六月五日京都へ帰る
と、ただちに新政権の樹立に着手された。
④天皇親政へ天子が自ら政治を行うこと一の
この政治体制を、建武中興(一三三四)
一三三六)という。
④一か、後醍醐天皇の中興政権は、足かけ
三年、満二年にして、足利尊氏の反乱により
瓦解してしまふことになる。(「世界大百科
事典」平凡社「建武中興」)。日本史に大阪
教育図書(株)昭和四十年六月一日発行、一八四
頁参照)

*

建武の性質の説明
⑤5908

5.909? 精誠 小林 744P 建武神宮 817
⑤5911 35行

紀下 478

あつた
熱田神宮の口草薙剣

古びた一通の祈願状が、熱田神宮の宝庫の
奥深くに、あまり人目にもふいふないでひっそり

残されてゐる。署名は足利尊氏とある。

祈禱の事、ことに精誠を致さるべきの状
件の如し。

建武二年十二月二十五日 尊氏（花押）
権宮司館

尚、精誠は「まごころ」まどりけのない

誠実さの意である。

それでは、この日づけにある「建武二年一

三三五」十二月二十五日」とは、どのような

時期だったのであらうか。口太平記などか

ら見てみることにしよう。

や、と成就するかにみえた「建武中興」で

あったか、わずか二年たらずのうち、また

もや戦雲があらたたく去来にはどめた。

鎌倉幕府打倒第一の功臣として後醍醐天皇

25
12
13

たけのたま天かい
電 44下の戦

5,910¹-1/2

新田義貞 由5907¹1837

坂本 1833

林田神宮82¹

日本書 14¹ 150¹
114¹ 150¹
114¹ 150¹

の^{いみな}尊治^{たかはる}の一字^{いちじ}を^も与^{あた}えられ^て改^か名^いした足利^{あしかが}尊^{たか}氏^{うじ}（初^{はつ}名^な高^{たか}氏^{うじ}）か、^も叛^{はん}逆^{ぎやく}したのだった。

■しかしながら最初^{さいしう}の頃^{ころ}、尊^{たか}氏^{うじ}は、

「天皇^{てんかう}の誤^ご解^{かい}である。思^{おも}ひを^いた^だいた君^{きみ}に向^むかつて、弓^{ゆみ}を^ひき^つ矢^やを^はな^てるは^すが^かで^きるは^ずは^ない。どうも罪^{つみ}から^のか^れら^れな^いの^ならば、自^い分^{ぶん}は^いけ^いに^け出^い家^けし^て謹^{きん}慎^{しん}し^{よう}。そ^うし^て天皇^{てんかう}に^も不^ふ忠^{ちゆう}で^なか^つた^ことを、子^し孫^{そん}へ^も残^{のこ}すの^みで^ある」

と決^{けつ}意^いの^ほどを^かた^てて^いた。第^{だい}四^し回^{かい}足利^{あしかが}尊^{たか}氏^{うじ}参^ま照^{しょう}と^いは^いえ

■尊^{たか}氏^{うじ}は、新^{あらた}田^た義^{よし}貞^{さだ}を^も大^{だい}将^{しやう}と^する官^{かん}軍^{ぐん}と^戦わ^さる^を得^えな^くな^り、箱^{はこ}根^ね竹^{たけ}の^{した}の^{たたか}戦^{いく}い^で官^{かん}軍^{ぐん}を^{やぶ}る。

■敗^は退^{たい}す^る官^{かん}軍^{ぐん}を^お追^おつ^て、尊^{たか}氏^{うじ}が^{きやう}京^{きやう}都^とへ^の進^{しん}撃^{げき}を^かい^しした^のか、この^ひ日^ひづ^けの^じ十三^じ日^{にち}前^{ぜん}、建^{けん}武^ぶ二^に年^{ねん}十^{じゅう}二^に月^{げつ}十^{じゅう}二^に日^{にち}の^{こと}で^あつ^た。

■と^する^と、尊^{たか}氏^{うじ}の^き祈^{いの}願^{がん}状^{じやう}に^ある^に十^{じゅう}二^に月^{げつ}二^に十^{じゅう}五^ご日^{にち}と^いう^ひは、彼^{かれ}が^{きやう}京^{きやう}都^とへ^の攻^せめ^のほ^ぼろ^とち^{ゆう}う、熱^{あつ}田^たを^{つう}過^かす^る日^ひと^いつ^ち致^ちし^{よう}で^ある。

■数^{かず}十^{じゅう}万^{まん}の^{たい}大^{だい}軍^{ぐん}を^{よう}し^て熱^{あつ}田^たへ^の到^{たう}着^{ちやく}したと

カラー
左頭の金角に、
はみ出して大きく掲載下さい。



「木造足利尊氏坐像」(大分県安国寺蔵)の頭部



①新たに見つかった「足利尊氏像」(部分) 〓栃木県立博物館提供 ②教科書などでおなじみだった「騎馬武者像」(模本) 〓栃木県立博物館蔵

5,910^p-2/2

(左頭、右下)
文字

573

14.024
第571回

あし かみ たか うじ
足利尊氏

『朝日新聞』平成29年10月27日 <肖像画の写し、坐像をくり>参照

H9.8.30(土)
H6.7.12(火)も

熱田神宮88⁹

5,911^P

はむか へ
進む・刃向う 1818⁹

改訂

藤原上野少季氏から、落合左近太夫行長にあ
愛知県一宮市の妙興寺文書のなかの一通
ことを示す文書が残されている。
さらに、足利尊氏が熱田の宮の守護を命じた
七に、
官軍に刃向うて京へ攻めのぼるのは心苦しい。
たときは八十万という大軍を統率する大將
軍としての立場があった。
大義名分と一門一
党の立場との板ばさみになって、尊氏の苦悩
ははてしがない。(「熱田神宮」篠田康雄、
学生社、ハートハ八頁参照)
*
さらに、その二年後の建武四年(一三三
七)に、足利尊氏が熱田の宮の守護を命じた
ことを示す文書が残されている。

頼朝一羽 妹 義兼 (大司馬) 妻 義兄 (姉妹の夫) 熱田神宮を義兄 (姉妹の夫) 改行
モ志は義兄に通ず

5912^P-1/2

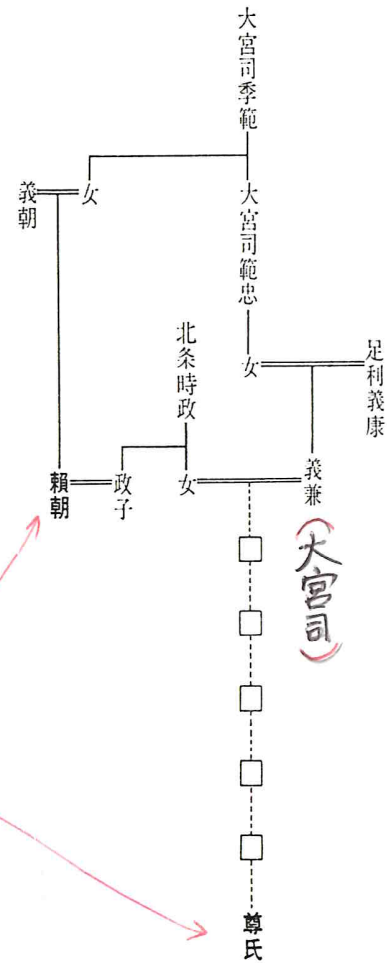
てた、建武四年二月二十三日の文書がそれである。
熱田の宮の警固を將軍家(尊氏)からおおせつかつた。貴殿はすみやかににおおせに從は、一族を率いて神宮の守護にあたられるべきである。
右の通り將軍家の命令を伝達する。
この当時権力の最高の座にあった尊氏が、熱田神宮へつまり草薙剣をお守りせねばならぬ。という積極的な姿勢をはつきり示している。
点で、この文書は貴重である。
そして大変興味深い事実がある。
熱田大宮司家と尊氏との間には、思ひかけないところに接点があった。(第60表参照)
足利氏の始祖である義康の妻は、熱田大宮司範忠の娘なのである。二人の間に生まれた義兼は、北条政子の妹の夫であつたから、頼朝とは妻を通じて義兄弟ということになる。
そしてこの義兼(尊氏の六代前の先祖)は、尾州志略によれば、しばらくの間、熱田神宮の大宮司になってゐる。

5912^P-3/2

・ 頁の上段、下段にまたがって
大きく掲載下さい。

・ 全てゴ4。
・ 文字を大きくして下さい。

1504
第60表 大宮司家と尊氏



太いゴ4

5,913^P

すなわち

尊氏の六代前の先祖義兼は、熱田神宮の

大宮司であつた

というのである。

熱田神宮大宮司を祖先にもつ尊氏は、おそ

らく、

我が国の度々の二朝時代に、草薙剣が果し

た大きな役割

について、極秘のこととはいへ、かなり詳し

く知つていたであらう。

当時

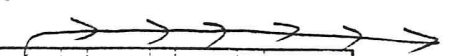
いかなからその草薙剣は、熱田神宮の

奥深くにひっそりと鎮まっていた。

HZ9(2017)12.6(p)~12.10(7D)
正T H9.8.30(土)
H6.7.13(水)
P

5,914^P

凡(四神) 90'
①5953^P 1/2 94"



米

田康雄、学生社、ハハし九六頁参照)
は、南朝の運命がつきるまで、一族の忠勤は
つづけられたようである。へ「熱田神宮」篠

と大宮司系譜にみえていふことから推察すれ
ば、昌能の子昌胤を始め、親昌・忠氏・季氏
など、一門の熱田大宮司は、それぞれ南朝方
に力をつくした。氏に決して妥協しようになかつた。
うかー熱田大宮司季範の本流の末裔は、尊
もつとも、どうした訳があつたから、
氏に決して妥協しようになかつた。